

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、語、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和7年11月28日(金)

働き方観感

「すべやる人」「すべやれない人」の違いは何かと考えた。私はどっちかといえば「すべやれない人」だ。自分を「すべやる人」に変えなければ働き方改革に繋がっていかない。「すべやる人」は生活にメリハリがある。積極的にオンとオフを設定しているようだ。私もそうだが「やれない人」は常に仕事のことばかり考え、あれこれ気になる、時間が分散し、無駄話ばかりで実利が上らない。朝から晩まで、仕事で頭から離れず、慢性化している。逆に「すべやる人」はオンとオフの違いがはっきりしている。仕事から離れる、趣味であったり家族との時間であったり、有意義な時間を計画的に過ごしているように思ふ。

働き方改革が叫ばれるようになってから、いつかと思うことは意識改革だと思ふ。「そうは言っても……」とか「でもですね……」とか言っている人もたくさん。積極的に仕事をしないことも働き方改革には必要である。

子供達が生きる未来社会⑥

「8090/1800」この数字が何回を表しているのかわからない。今後10年から40年の間に、20歳から39歳の若年女性の人口の減少率が5割を超える自治体を「消滅可能性都市」とし、さらに「消滅可能性都市」とし、さらに総人口が1万人未満になる自治体について「消滅可能性が高い」と定義されているのだが、それによると、若い女性の人口が半分に以下に減少する市区町村は全体(約1800)の5割にあたる899におよび、うち人口1万人未満になる5023の自治体は、実際に消滅してもおかしくない危機にあるといわれている。現在1800程ある地方自治体のうち、半分以上が消滅する可能性がある……長洲町はどうかだろうか。それは今後の行政や教育等々、超スマート社会(Society 5.0)を意識した社会の仕組みの構築、新しい雇用の創生、未来社会に対応できる人材の育成等にかかっていると言っているように思ふ。

子ども達が生きる未来社会⑦

「グローバル化」とは、情報通信技術の進展、交通手段の発達による移動の容易化、市場の国際的な開放等により、人、物、情報、国際的移動が活性化して、様々な分野で「国境」の意義がいまにならなくなるとも、各国が相互に依存し、他国や国際社会の動向を無視できなくなっている現象と捉えることができる。

要するに地球上のあらゆる国が関与している関係している。そのような状態が広がっているといふことですね。先日テレビでマイクロナステックの問題が取り上げられていましたが、日本だけで解決できる問題ではありません。特に海洋環境に与える影響が大きくなり、世界の人々が自らの問題として取り組む必要がある問題です。だから国際会議も実施されているのです。この問題に限らず、その他の環境問題、人権問題、政治経済問題等々、世界が一つになって解決への策を考えなければなりません。そのために、教育は大きな期待や責任を負っています。世界で活躍するグローバル人材の育成です。グローバル人材の育成には語学力等が必要だというイメージがありますが、それは今後A+が通訳をすることで解決すると考えています。グローバル人材育成の上で絶対に必要なことは、故郷に対する愛です。故郷を愛しているからこそ、他国(他国)との協働連携を促せるのです。

シリーズ「自分を語る」#55

平成11年度0月、通勤途中の出来事です。私は朝からあいさつ運動をするために早めに通勤していました。国道208号線を右折して、あて100mで職場到着という交差点で対向車が追いついてくる時のことです。突然、大きな音と衝撃が走り、何が起こったかわからない状態で正気を取り戻さず意識を集中しました。まず、事実を確認しなければと周りを見回しました。その時、首筋に筋肉が引きつるような嫌な痛みが走り、首を動かしている……「ルームミラーを目だけで追って、そこには1台のセダンが斜めに止まっていて、中から人が出てくる気配がありました。私の車は交差点の真ん中で停止していました。咄嗟に(他車の邪魔になる、よくねえ)と思い、左路肩まで移動しました。そこで車から降りました。他の部分は異常がないようでしたが、とにかく首が痛かったのを覚えています。車から降りるやうに人に立って開いて同時にすみませんでした。大丈夫ですか?」と言。いわゆる追突でした。状況が解って、まずは警察に連絡しました。お巡りさんが来られるまでの間、被害状況を確かめました。まずは「首」です。後になつての診断では「頸椎捻挫」いわゆる「むち打ち」です。次に「手首」です。これはハンドルを握っていたことに由来するのですが、後方からの衝撃で手首を痛めていました。手首はあまり痛くなかったのですが、運転を片手に頼っていたような記憶があります。車の被害は凄かったです。バンパーが外れ、後方部分の車体フレームが曲がっていました。

この事故の原因は運転手の居眠りでした。私も随分若い方で、荒尾までの通勤途中だったからです。4月に就職し、仕事に慣れてきた頃の心の緩みだったのだと思います。泣きそうな顔をされていたので、あまりお話をしませんでした。お互い運転は気を付けましょう。」と言葉を交わし、後処理は保険会社に任せました。私は交差点でしっかりした姿勢で待っていたので、責任は問われませんでした。防衛運転という視点で考えた場合、もししたら防げるだろうとまで考えたことがありません。

その後は、整形外科の電気治療に3カ月ほど通い続けました。事故直後の写真には、運動会の練習時期でしたので首に包帯を巻き、真っ直ぐ前しか向けない私澤田の姿があります。しかも、しっかりと治しておかないと後が怖いよ。」と有り難いアドバイスを受けた先生方から頂き、毎日、しっかりと電気治療に行きました。「もう心配ないな。」と思えるまで、結局半年くらいかかりました。今でも思うのですが、大人も子どもも危機感を持っておくと、事故を未然に防ぐために必要なのかもしれません。(つづ)